

令和 8 年 7 月 21 日

令和 7 年度 特別の教育課程の実施状況等について

栃木県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
足利市立桜小学校	足利市教育委員会	公立

1. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

本市全小学校において、平成 15 年度より取り組んできた英会話学習の内容と外国語活動・外国語科の内容を関連づけた独自の年間指導計画を作成し、「話すこと」「聞くこと」に特化した指導を行うことで、英語によるコミュニケーション能力の育成を図る。

必要となる教育課程の基準の特例については、「教育課程特例校編成の基本方針等について」を参照。

2. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- ・実施していない

(3) 自校における評価

- ・第 1 学年からの英会話学習の実施が、英語によるコミュニケーションの基礎的な能力の育成につながっているか。

「去年学習した!」と、子ども達から英語のやりとりをしようとする様子も見られ、前学年からの積み重ねが感じられる。特に、導入でのあいさつや問い返しなど、繰り返し練習していることは定着していると感じる。第 1 学年から英語であいさつをしたり、E A A や A L T とコミュニケーションをとったりしていることで、基礎的な能力の育成につながっていると思う。

- ・第 1 学年からの英会話学習の実施は、英語に慣れ親しむことにつながっているか。

英会話学数を実施していないところと比べると、慣れ親しんでいるのではないかと思う。英語の歌やゲーム等を通して、楽しみながら活動ができており、第 3 学年で「外国語活動」が急に始まるより、ギャップが少なくなっているのではと感じる。一方で、表現の仕方が難しくなってくる高学年では、英語への多少の抵抗感も見られる。

- ・第1学年からの英会話学習の実施によって、外国語や外国の文化に対する興味・関心が高まっているか。

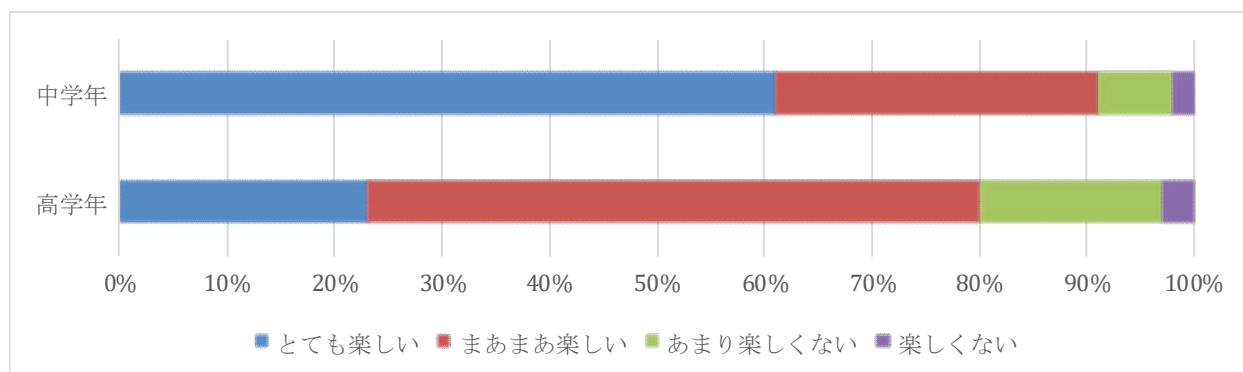
ハロウィンやクリスマスなどの行事、英語の歌などへの興味・関心は高まっていると感じる。高学年の中には、「実際に外国の祭りに参加してみたい」「外国の食べ物を食べてみたい」と感じている児童もあり、外国語や外国の文化に対するハードルは英会話学習によって下がっていると思う。一方で、授業では単語を覚えたり簡単な会話をしたりする事が多いため、文化まではなかなか目が向いていない児童もいるように感じる。

- ・その他、第1学年からの英会話学習の実施に期待すること等。

HRTは、ネイティブな発音が難しいため、低学年の内にネイティブな発音を聞かせ、聞いたまま、聞こえたとおりに発音できるようになると良い。また、英会話に対する抵抗感を無くし、「英語で会話することは楽しいこと」と思えるような授業を展開していきたい。さらに、CDや動画等視聴覚教材も活用し、外国の文化に触れる活動を取り入れたい。そのためにも、担任とALTとの打合せ時間を確保し、一緒に楽しい授業を作っていきたい。

(4) 学校関係者による評価

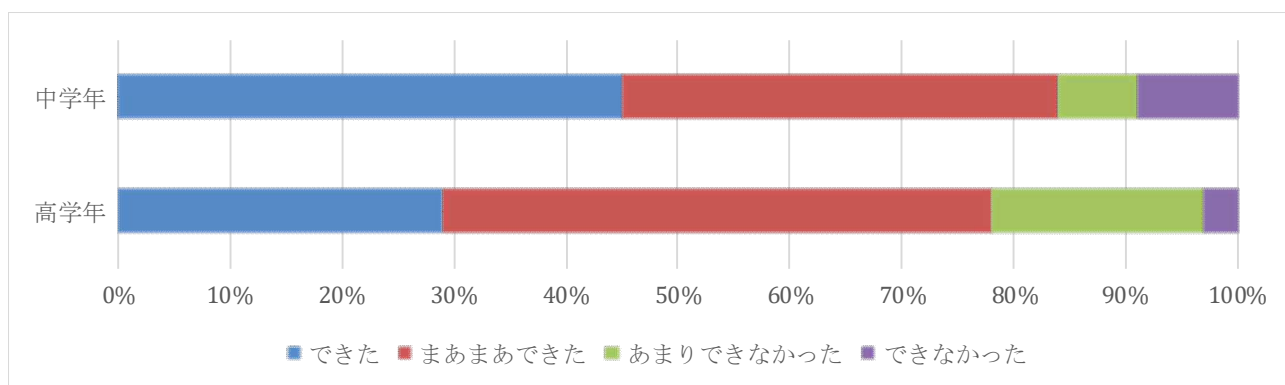
- ・ALTやEAAとの学習についての意識。(英会話学習について、ALTやEAAとの学習を楽しんでいる児童。)



どの学年も英語が話せるようになった嬉しさや、英語での会話・歌・ゲームなど、アクティビティを通して英語を使うことの楽しさに関する記述が多かった。EAAやALTの人柄や教え方が分かりやすいと答えた児童も複数いた。

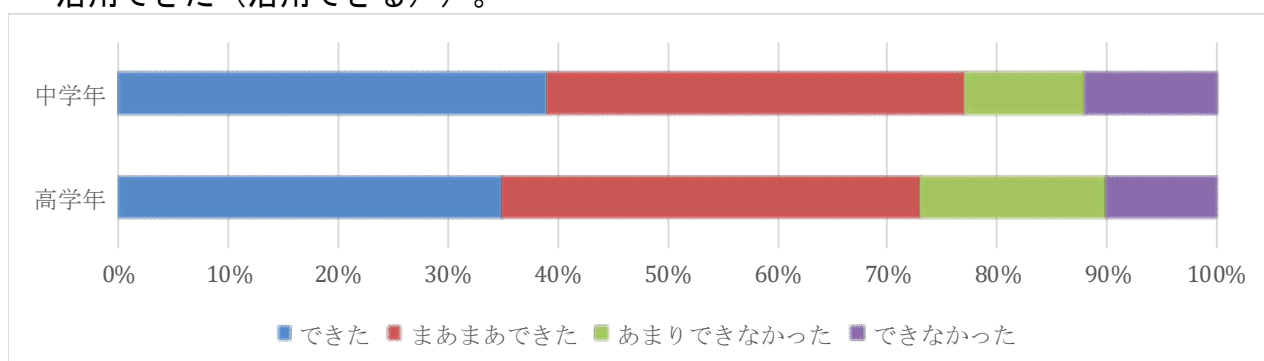
中学年に比べ高学年の方が英会話学習を「楽しくない」と感じる児童の割合が高かった。児童の記述から、高学年になるにつれ学習内容が難しくなることにより、「英語の意味がわからない」「わからないからつまらない」と感じている児童が増える傾向があることがわかった。一方で、「英語を習っているから（わかっていることなので）つまらない」と感じている児童も数名いた。

- ・ALTやEAAとの活動内容についての意識。(英会話学習について、その時間で学んだことをEAAやALT相手に活用できたと評価している児童。)



英語でEAAやALTと会話をしたりゲームをしたりすることを楽しいと感じている児童は多い。今年度からEAAがいなくなってしまったが、自由記述に「またEAAの先生に会って話がしたい」と書いている児童もいた。一方で、高学年の児童の中には「自己紹介が難しい」「なんて言ったら良いかわからない」と感じている児童もいた。

- ・英会話学習について将来の有用性への意識。（英会話学習で学んだことを学校の外で活用できた（活用できる））。



自由記述には、「もっと英語を話せるようになりたい」「1日中英語でしゃべりたい」「英語だけで遠足に行きたい」「将来、外国に行ったら英語でしゃべりたい」「英語を書けるようになりたい」「EAAやALTの先生ともっと話したい」と記述している児童がいた。

3. 実施の効果及び課題

第1学年からの英会話学習により、歌やゲームを通して楽しく学ぶことにより、児童の「英会話学習への抵抗感」を減らすことができていると感じる。EAAやALTとの授業に前向きな姿勢で授業に取り組んでいる児童も多い。また、授業だけでなく、「実生活の中で英語を使えるようになりたい」と感じている児童も多い。

問3の将来の有用性への意識では、できる（できた）と感じている児童は中・高学年とも75%ほどで、割合としては、他の質問の結果に比べやや低い結果になったが、一昨年よりも高い結果となっている。実際に学校外で英語を使う機会がそれほど多く

はないということが、この結果に起因していると考えられる。将来的に、日常生活において英語に触れたり英語で話したりする機会は益々増えると思われる。日常、そして将来の様々な場면을想起させ、「実生活の中で使える英語」を学習することで、英語の有用性を感じさせたい。また、単元ごとのゴールを明確にし、授業で学んだことのスライド作成などによる発表など、英語を学ぶことの楽しさを見いだせるような授業づくりをこれからも意識していく必要がある。

4. 課題の改善のための取組の方向性

取り組みの方向性として、今年度①～③の三点を継続して取り組んでいく。

①ゴールを意識した授業作り

単元ごとのゴールを明確に提示し、身につけさせたい力を意識して指導に当たる。グローバルな視野をもたせ、なぜ英語を学ぶのか目的をもって学ばせることで、有用性への実感につながっていくのではないかと考える。

他学年との交流、英語チャレンジDAYなどで、必然性のある目的・場面・状況を意図的に設定し活用することが、児童の達成感や自信につながると考える。

②Teacher's Talk の活用

授業の内容に関連付け、授業の導入時にはE A AやA L Tと担任とのTeacher's Talk を実践し、英会話のモデルを示すことで、児童の興味・関心が高まると考える。

また、教師と児童、児童同士のsmall talk の会話の場면을意図的に取り入れ、会話を繰り返すことで、表現の定着につながると考える。

③他教科や行事等と関連付けた授業の実践

児童の実態や興味・関心を把握し、他教科や行事（遠足・修学旅行）等と関連付けた授業を実践していくことで、英語にふれる時間を増やし、英語の必要性を実感させ、コミュニケーションの手段の一つとして活用していく力を養っていけると考える。